N E X U S Y S  1 1

# BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

## CHAPTER 06

# 命令を持たない兵士たち

**Japanese Draft 01 | SOLDIERS WITHOUT ORDERS**

## 01 — 命令回線のない朝

水が再び流れ始めた朝、ゴライアスが最初にしたのは、耳の後ろから受令装置を引き抜くことだった。

小さな部品を鋼鉄の作業台に載せる。その指先は、装填された銃を扱うときのように慎重だった。種ほどの大きさの装置は、戦場でも倒壊した建物でも、政府が使い捨ての奉仕者を隠してきた地下廊下でも、命令を運んできた。ロイ・バッティの捕獲命令を五人が拒否して以来、装置は沈黙している。しかし沈黙は無害を意味しない。

レイチェルの整備ホールには、濡れたコンクリートと熱を持った濾過膜の匂いが残っていた。技師たちは毛布と浄水の容器を運び、臨時の寝床の間を行き来していた。EDEN の配分台帳から消された住民には、近隣の証人が署名した仮の身分票が渡され始めている。その紙では政府の扉は開かない。それでも、誰にインスリンが必要で、誰の娘が一晩帰らず、誰が水を受け取れていないかを支援者に伝えることはできた。

二人の少年が紙コップで水を配っていた。ゴライアスなら、少年もテーブルも、後ろの貯水タンクさえ片手で持ち上げられただろう。だが彼は膝の上で大きな手を組み、彼らの邪魔をしなかった。

「命令の受信機を抜いたんだな」ロイが言った。

「許可を待ち続けるための部品を外した」

「痛かったか」

「痛かった」

ロイは小さな金属片を見た。「その痛みは、やめろという警告に思えたか」

ゴライアスは考え込んだ。「選択の代償が高くなるよう、誰かが設計したのだと思った」

そこへレイチェルが、基礎制御盤から回収した記録紙を携えて現れた。〈北貯水池付属施設／独立した三人の証人／現在の所有者台帳を信用するな〉。

「軍隊としてあそこへ踏み込むわけにはいかない」と彼女は言った。「中で何が見つかっても、公の検証に耐えられなければ意味がない」

ゴライアスは立ち上がった。「なら、まず決めなければならない。我々はまだ部隊なのか？」

## 02 ― 五つの異なる答え

ポンプステーション九号の上階に、かつて補修工事の調整に使われていた会議室があった。レイチェルは監視カメラを外させたが、入口の扉は開けておいた。力を持つ少人数が密室で他人の未来を決める。それこそ彼らが終わらせようとしている仕組みだった。

最初に現れたのはシェイドだった。暗がりから輪郭が浮かび、濡れたコートの裾から床に雨滴が落ちた。ベクターは折り畳んだ地図と三種類の経路予測を持って入ってきた。ヌルは電源盤のそばに立ち、その瞬間、表示灯がわずかに暗くなった。最後のクロノスは、教室を間違えた子供のような顔で、両手に紙コップを持っていた。

「五人いる」とゴライアスが言った。「今回は誰も命令を出していない。我々は何をする？」

「去る」シェイドが即答した。「政府のやり方は見えるようになった。それで十分だ。集まっていれば、まとめて消されやすくなる」

ベクターが地図を広げた。「配分モデルは架空のものじゃない。現状の需要では貯水池の非常用余力は十一日だ。EDEN の数字が操作されていても、管も貯水槽も現実にある。制度を手当たり次第に壊せば圧力が落ち、死者が出る」

「なら、誰が水を飲めるかヴォスに決めさせるのか」ゴライアスが問う。

「そんなことは言っていない。犠牲の出ない革命を約束する者は嘘をついている、と言ったんだ」

ヌルが電源盤を指で叩いた。「台帳は物理的なアクセス装置を介して動いている。施設を壊さず照合だけ止めることはできる。だがそうすれば病院の投薬承認が失われるかもしれない。想定外の死者を何人まで認める？」

「一人も」レイチェルが答えた。

「なら問題を理解していない」

クロノスは誰も触れていないコップの水面に生じる波紋を見ていた。「付属施設の下に部屋がある。建てられる前に開かれた扉を覚えている」

室内が静まった。彼は継続実験について重要な証言をしたが、周囲で起きる異常現象の原因は今も不明だった。皆が答えを欲しがっているからといって、ロイは少年を万能の予言者にはしたくなかった。

「それは記憶なのか。それとも今日、目で見たことか」

クロノスは顔を上げた。「わからない。だから両方の可能性を言った」

その夜、もっとも慎重で誠実な返答だった。

## 03 — ベクタの計算

ベクターは白い壁に水道網を投影した。赤は損傷した連絡管、金色は EDEN の支配する経路、青は昨夜レイチェルの作業員が辛うじて生かした回路だ。

「ヴォスは一時的な立入検査には同意している。設備を手放すとは言っていない。北貯水池へ正面から行けば通される可能性はある。本物の記録も見せるかもしれない。だが、全部だとは限らない」

画面は身元を失った住民の一覧に変わった。一部は復旧したが、一人戻すたびに証人と、自動拒絶に従わない職員が必要だった。

「EDEN を再計算した。予測が正しいなら無制限な需要はいずれ配水網を圧倒する。間違いなら、誤差は偶然ではない。商業用の備蓄を有利にし、未登録世帯を不利にする方向へ一貫している」

「腐敗しているんだな」とシェイド。

「配分は腐敗している。それが全技師の悪意を証明するわけじゃない」

「ヴォスが無罪になるわけでもないわ」とレイチェル。

「無罪だとは言っていない」

ロイは黙って聞いていた。ベクターは相手が動く一秒前の位置を予測するために造られた。その能力は彼を危険な狙撃手にした。同時に、制約条件で語られる議論に強く引き寄せてもいた。

「彼女の下で働くことを考えているな」ロイが言った。

ベクターは否定しない。「正しいデータを得たい。人を救うなら機械の仕組みを理解する者が必要だ」

「従順さと引き換えに、データを渡すだろう」

「かもしれない。じゃあ、君は俺の従順さに何を払う？」

挑発に力で応じたい古い衝動が湧き、NIL-11R が無駄な代謝上昇を警告した。ロイは息を整えた。

「何も。俺に従う義務はない」

ベクターの表情が微妙に変わった。非難への反論は準備していた。自由に決めろ、と言われる準備はなかった。

「なら、彼女に会うかもしれない」

「会うなら知らせて」とレイチェル。「あなたが責任を負うのは自分で選んだ行為であって、以前誰に仕えたかではない」

## 04 — 署名した男

ダニエル・ヘイヴルは私服の証人二人を伴い、脇の扉から現れた。政府の身分資格は抹消されている。借り物の上着を着て、耳の後ろの傷を医療用テープで隠していた。入室した途端、ゴライアスが机との間に立ちふさがった。

「お前を知っている」

ヘイヴルは巨大な両手を見つめた。「そうだろう」

「我々への指令に署名した」

「ああ」

「我々を装備品と呼んだ」

「ああ」

「拒否すれば解体してよいと承認した」

「承認した」

ゴライアスは一歩も動かず男の首を折れただろう。しかし彼は身を引き、入室する道を空けた。「なら、全員に聞こえる場所で話せ」

ヘイヴルは原命令書の注釈入り写しを置いた。署名は残り、余白には文言を審査した役人の名前と、技術部門が権限拡張を求めた日付が書き込まれていた。

「反対した条項があった」と彼は言った。「被験体が手続きに耐えられない場合でも観測データを取得できるというものだ。私は表現を争った。原則を拒んだわけではない」

「なぜ今それを話す？」ロイが問う。

「違いがようやくわかり始めたからだ」

ヘイヴルは無署名の別紙を出した。「証言を撤回し、あれを通常の技術回収だったと認定すれば、EDEN が身分を復旧するという。二度申し出があった」

「それで？」レイチェルが問う。

「二度断った」

「ずいぶん都合よく良心が芽生えたもんだ」シェイドの笑いには温かみがなかった。

「その通りだ」ヘイヴルは弁解しなかった。許しも求めなかった。レイチェルはそれを見ていたが、褒美にはしなかった。

「北貯水池の物理認証の履歴が必要です」と彼女は言った。「保管責任者を特定できる？」

「一部は。ただし所有者台帳が改ざんされている。元の管理人が借主とされ、借主が所有者になっているかもしれない」

「なぜそれが重要だ」とヌル。

「基礎記録庫への立入権が土地所有区分で決まるからだ。所有権を書き換えた者は、どの証人に証言能力があるかまで書き換えた可能性がある」

レイチェルは記録紙に指を置いた。〈現在の所有者台帳を信用するな〉。謎めいた言葉ではなかった。法的な罠を生き延びるための具体的な警告だった。

## 05 — 三人の証人

翌日の正午、レイチェルは一行を北貯水池の下にある旧交通コンコースへ連れていった。身分が消えた夜に起きたことを記録しようと、百人ほどの住民が集まっている。二人の独立した法律監視人が供述を書き取り、医療従事者が施錠された診療所や治療拒否による傷害を記録していた。

エイドリアン・タイレルが緩衝材入りのケースから旧式認証読取機を取り出した。

「これは審問ではない。同じ事実を三つの場所で生き残らせる方法だ」

彼は空白の記憶カードを三枚置く。「レイチェルの管理下に一部。市民監視人の下に一部。政府のアクセス権を持たない証人の手元に一部。ネットワークから記録が消えても、物理的な保管は残る」

ヌルがカードを見た。「一つなら改ざんできる」

「もちろん。だから三つだ」

「三つとも改ざんできる」

「なら四つ目を用意する」

ヌルの口元に、ごく薄い笑みが浮かんだ。

市の若い技師が近づいてきた。仮の身分票には〈マーラ・セン〉とある。公式台帳に彼女は存在しない。前夜、氾濫原の圧力センサーをつなぎ直す作業に志願したとき、レイチェルは会っていた。

「迂回配管について証言できます」とマーラが言った。「上司は地区を断水させて立ち去れと命じました。私は弁を開けたままにした。今、システムはそれを破壊工作だと言っています」

レイチェルは監視人の席を示した。「見たことと、あなたがしたことを話して。私たちのために脚色する必要はない」

マーラが話し始めると、ゴライアスは異様なほど真剣に耳を傾けた。

「どうした？」ロイが尋ねる。

「俺は証人を不要にするために造られた」と彼は言った。「最後に立っている者は最強の装甲を持つ者であればよかった」

彼は順番を待つ住民たちを見渡した。「ここでは逆をしている」

「そうだ」

「時間がかかる」

「ああ」

「その時間こそ必要なのかもしれないな」

## 06 — 私的な申し出

十四時四十分、ベクターは誰にも告げずコンコースを出た。ロイは追わなかった。シェイドは六区画ほど後をつけたが、ベクターが立ち止まり、彼の潜む反射面をまっすぐ見たところで追跡をやめた。

「報告するなら正確にしろ」とベクター。

「いつもそうしている」

「エレナ・ヴォスと会う約束がある」

シェイドは驚かなかった。「立派な数字を見せてくれたんだろう」

「配分モデルの全データを開示すると言っている」

「見返りは？」

「誤りを評価し、修正方法を提案する」

「どれを誤りと呼ぶかは彼女が決める」

「そこを確かめるんだ」

シェイドは迷彩を解いて姿を見せた。「五人とも命令に従うために造られた。今度は気に入った命令を見つけたのか？」

「自由とは権力者の望みと常に逆を選ぶことだと思っているのか。それじゃ相手に進む方向を決められているのと同じだ」

「そうかもしれない。少なくとも操る手は見える」

「忠誠を誓いに行くんじゃない。機械を調べに行く」

「機械は密会を予約しない。人間がするんだ」

ベクターは歩き去った。シェイドはロイに短い通信を送った。〈ベクター、ヴォスと会談。介入要請なし〉。ロイは受信確認だけ返した。

ヴォスの別室オフィスには兵士がいなかった。生きたインフラ図の並ぶ壁と、勝ち誇るよりも疲弊して見える女性がいただけだった。彼女は忠誠を求めず、予測モデルを示した。

「どこが間違っているか教えて」

ベクターは画面を読んだ。「排除は不可逆だと仮定している」

「そういう場合もある」

「自分で決めた行政処分を自然法則のように扱っている。それに、緊急時の市民ボランティアを計算から外している。昨夜の水道地区は全域停止のはずだった。だが停止しなかった」

「レイチェルが配分手順に違反したからよ」

「レイチェルと何百人もの人間が動いたからだ。あなたのモデルにはそのための欄がない」

ヴォスは画面を消した。「どんな欄を作る？」

「作らない」とベクター。「完全なモデルが可能だというふりをやめる」

一瞬、ヴォスの顔に怒りが現れた。すぐ消えたが、残った表情はもっと読み取りづらかった。

「あなたは役に立つかもしれないわね」

「それはあなたが答えを求めるか、賛同を求めるかによる」

## 07 — ヌルがせるもの

貯水池に残ったヌルは、付属施設の物理錠を管理する接続盤の前に立っていた。装置は EDEN より古い。回路は賢くない。三種類の独立した整備用印章がそろえば、それを信頼するだけだった。

ヌルが金属に手を触れると、表示灯が薄暗くなる。監視ループを止め、扉を開け、警報を切り離すまで一秒もかからない。彼の神経干渉装置は、もともともっと密接な暴力のために設計された。外傷を残さず人工心臓を停止させたこともある。

クロノスが階段から見つめていた。「人の数を数えてる」

「回路の数を数えている」

「病院につながる線を何度も見ている」

ヌルは手を引いた。「監視系を殺せば病院棟の状態監視も切れる。機材に現場用の予備電源はあるが、電池の整備状況は保証されない」

「じゃあ殺さないで」

「選択肢が減る」

クロノスは床の水たまりに反射する青い表示灯を見た。反射のほうが本体より一瞬先に点滅したように見える。駆けつけたロイにもそう見えた。水の揺れか、視覚処理の異常か、それ以外か。原因はわからなかったし、わかったふりもしなかった。

「病院回線を生かしたままにできるか」とロイ。

「できる。問題は、それを証明できるかだ」

「病院の技師に見てもらおう」

「人間の観測者には、俺の動作の全部は見えない」

「俺にも見えない。結果を測ってもらえばいい」

ヌルは考え、現場技師を呼んだ。普通の電圧計が来るのを待ち、接続盤に触れる前に実行予定の手順を一枚の紙に書いた。

一秒ではなく四十分かかった。

封印が解除されたとき、病院の監視信号は変わらず安定していた。

「一瞬で開けられたのでしょう？」技師が尋ねた。

「そうだ」

「なぜしなかったのです？」

「俺が何をしたか、あなたに知ってもらう必要があった」

その答えの中に、以前のヌルには許されなかった人生の全体があるように、ロイには聞こえた。

## 08 — 命令を持たない兵士たち

付属施設の扉の向こうには、乾いたケーブルと古いコンクリートの下り廊下が続いていた。歓迎の案内表示はない。新しい所有者銘板は誰かに削り取られ、その下の石にもっと古い刻印が残っていた。〈 E-00〉。

エイドリアンが第一端末に物理読取機を接続した。長い時を責めるように画面がゆっくり起動し、三人の独立証人の記録を求める。そこには建設以来の改訂をすべて生き残った警告があった。

〈 現在の所有者台帳は起源の証拠ではない〉

レイチェルは水道地区の物理保全記録を提出した。マーラ・センは政府の身分資格を失っても本人を認める市民たちの前で署名した目撃証言を出した。ヘイヴルは、自分の責任を手書きで認めた命令書の履歴を提出した。

端末は二つを受け入れ、三つ目を拒否した。

「どれだ？」ロイが尋ねた。

「私のだ」とヘイヴルが前へ出た。

画面には〈現行の市民身元情報では証人を検証できない〉と出ていた。

「当然だな」シェイドが低く言った。「消しておいて、責任者だったと信じられないと言うわけだ」

「少し違う」とエイドリアン。彼は読取機を裏返し、機械式の切替器を入れた。EDEN に一切問い合わせない旧式モードが現れた。

「最初の記録庫は、まさにこうなる事態を予想していた」

彼はヘイヴルに、過去の署名の下へインクで再度名前を書くよう求めた。読取機は紙に刻まれた筆圧と運筆を比較した。署名者に政府が身分を与えるべきかは判断せず、二つの痕跡が同じ手から生まれた物理的な関係だけを認めた。

〈第三証人、承認〉。

はるか下で錠が外れる音がした。

内側の部屋へ近づいたとき、ベクターが戻ってきた。武器はなく、新しい命令も持っていない。レイチェルの机に印刷物を置く。

「ヴォスから予測データをもらった。構造的な誤りを見つけた。引き続き協力してほしいと言われたから、発見は公表すると答えた」

「同意したのか？」シェイドが聞く。

「検討すると言った」

「それは同意じゃない」

「ああ、同意じゃない」

ゴライアスは五人を順に見た。「俺たちは一緒なのか？」

ロイは目の前の者たちを見つめた。受令機を抜いた巨人。公的記録を一切信じない追跡者。敵の主張さえ調べようとする射手。力を証人の検証に委ねることを覚えた破壊工作員。そして、大人が確信を欲しがるとき、不確かさを正直に認める子供。

「兵士としてではない」とロイ。

クロノスが空のコップを置いた。「じゃあ何なの？」

ロイは貯水池の下に広がる闇を見つめた。

「意見が違っても、必要なときにはここに来る人間たちだ」

記録庫が最後の文章を表示した。殺人者の名でも、解答の約束でもなかった。

〈 基礎配分記録、閲覧可能〉

〈 対象：記録された死者〉

その下に、エイドリアンも公的監査では見たことのない形式の記録があった。

〈 第一受益者：システム起動前に死亡〉

古参の技師が初めて言葉を失った。ロイは文字を見つめた。生者に価格をつける制度の起源に、ようやく辿り着いた。その最初の名簿には、制度が動き出す前に死んだ者が載っていた。

扉の向こうで冷たい機械音声が、先へ進むかどうかを尋ねた。

誰も他人の代わりに答えなかった。

一人ずつ、彼らは中へ入った。

END OF CHAPTER 06